

ジステンパー

Canine Distemper

犬の代表的なウイルス性伝染病で、世界各地で発生しています。ワクチンが開発されるまでは多くの犬が感染し、命を落とした病気です。現在でもワクチン未接種の仔犬や追加接種していない老齢犬の死亡率が特に高い恐ろしい病気で、大変感染力が強く、犬科動物だけではなく、フェレットなどにまで感染します。

原因

ジステンパーの原因はジステンパーウイルスの感染です。感染は主にジステンパーにかかった犬との接触、その分泌物の飛沫吸入による経気道感染、あるいは直接病気の犬に接触しなくても、その病犬のだ液や尿、便を舐めたり、臭いを嗅いだりすることによる経口感染でも成立します。

症状

症状は全身的に進行するのが特徴です。最初は何となく元気がないといったことから始まります。次に目やにと鼻水、それに咳といった呼吸器症状、さらに嘔吐、下痢といった消化器症状へとすすみ、最終的には脳神経症状を出して、死に至るケースもあります。この間特徴的な発熱がみられることもあります。また、足の裏のパットと呼ばれる部分や鼻先が異常に固くなるハートパットと言われる症状があらわれることもあります。

しかし、高齢で感染した場合は、このような典型的な症状を出すことは希で、いきなり神経症状を出し、獣医師を混乱させる病気の一つです。

ジステンパーは幸運に命が助かって、チック（まぶたや顔面の筋肉がピクピク痙攣する）と呼ばれる神経症状の後遺症に一生悩まされることもあります。

診断法

動物病院では、一般的に、問診、視診、触診、血液検査などを行い仮診断して治療を始めます。確定診断を行うには、検査機関に依頼して抗体検査や特殊な方法によりウイルスを確認します。

治療法

今のところジステンパーウイルスを殺せる薬はありません。そのため獣医師の手によって様々な治療方法が試行錯誤されてきましたが、はっきりとした効果が判定された療法はありません。

一般的には細菌の二次感染を防止するために抗生物質の投与、解熱剤、抗炎症剤、神経症状が出ている場合は抗てんかん剤、点滴や栄養剤の投与などの対症療法を行います。また、インターフェロンが用いられることもあります。

自宅での看護法

治療は獣医師に任せるしかありません。自宅では、発病した犬は特に大量のジステンパーウイルスを排出しますので、他の犬への感染に十分注意してください。排泄物や食器、敷物などは焼却処分するか、クレゾール、1%の逆性洗剤でよく消毒します。

退院あるいは通院できるようになったら、消化がよく栄養価の高い食餌を与え、獣医師から指示された投薬をきちんと行いましょう。また、暖かく十分な湿度を保った環境を整えてあげ、汚物などはこまめに処理してあげて清潔な環境を保つことが重要です。

予防法

ワクチン接種で予防するしかありません。ジステンパーのウイルスが犬の体内に侵入しても、ワクチンにより免疫ができていれば発病することはありません。

メモ

仔犬が生まれたら、母犬から初乳が与えられ、ジステンパーウイルスに抵抗する力をもらいます。しかしながらこの力はいつまでも続くものではなく数カ月でなくなってしまうので、必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムと追加接種を行いましょう。また、母犬のワクチン接種の有無が仔犬に大きく影響します。妊娠前には必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムを行いましょう。

ジステンパーはフェレットでの致死率が100%という恐ろしい伝染病です。アメリカではフェレット用のワクチンが使用されていますが、日本では許可されておりません。そのため一般的に犬用のワクチンを用いているのが現状です。必ず獣医師と相談の上で接種するようにしましょう。